

Title	P.T.フォーサイスにおける祈りの格闘性 (Prayer as a wrestling with God)の神学的考察：十字架から汲み出す祈り (Prayer must draw from the Cross.)
Author(s)	野口, 日宇満
Citation	2009 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2577
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

博 士 論 文

要 約

論文要旨

本論文の主題は「P.T.フォーサイスにおける祈りの格闘性(Prayer as a wrestling with God)の神学的考察」であるが、その狙いは、いかにしてフォーサイスが主張した「祈りの格闘性」を現代の教会において回復することができるのか、その可能性を神学的に論じるところにある。彼は「われわれの間で祈りはほとんど格闘的でなくなってしまっている」(Prayer with us has largely ceased to be wrestling.)と言い、牧師、神学者としてイングランドの教会の霊的現実を深く嘆いている。それはまさに伝道の危機と教勢の低下が嘆かれて久しい現代の日本の教会の嘆きでもある。

フォーサイスは深い祈りにおける神との人格的な交わりを重んじた類稀なる神学者であった。そして彼の祈禱論の秀逸さは、ただ熱心に祈らなければならないという祈りの実践を勧めるだけでなく、何ゆえに祈らなければならないのかという祈りを成立させる神学的基盤にまで深く掘り下げて論じている点にある。彼の祈禱論は、いかにして神が求める格闘的祈りを回復することができるのかという実践神学的課題と同時に、彼が「神学的祈りを恐れないようにすべきである」と言ったように組織神学的課題を視野に入れたものであった。

またフォーサイスが『祈りの魂』を出版した1916年は、第一次世界大戦の只中であつた点を見過ごすことはできない。彼は「文明の破滅」と呼んだ戦争の現実の中で、決して道徳的ニヒリズムに陥ることなく、神の主権と義、十字架において現された神の聖なる愛を強調した。彼は、一切の偽りの権威が剥ぎ取られていく大戦の現実の中で、なお神の義を信じるためには、「至高の神義論」と呼ぶ十字架における御父と御子における格闘的祈りに関して決定的に成就した贖罪にわれわれもまた祈りに関してあずからなければならないと述べる。すなわち神はご自身の義を現すために戦争という事態が起きることもまた許しておられるのであり、それゆえになおわれわれは神の摂理の御手を信じて祈らなければならないのである。そしてその時の祈りは決して運命に身を委ねる諦めに満ちた祈りであってはならず、神の摂理は神の民の祈りを通して動いていくのであるから、神の意志に影響を与えて歴史を動かす格闘的祈りでなければならないと述べる。

祈りに関する著作は数多くある中で、何ゆえにフォーサイスを本論文で取り上げたのかを明確にするために、まず第1章において祈りに関して論じた代表的な神学者の祈禱論を取り上げる。その際、特に、フォーサイスが強調する意志的祈り、すなわち

祈りは創造において神から賦与された自由の行使であり、それゆえに祈りにおいて最高の神の自由にあずかることができる点との比較において論じる。また第2節においては、実践神学の立場から彼が強調する祈りの格闘性が決して単なる彼の空虚な理想ではなく、事実今日に至るまで多くの聖徒たちによって実証されてきたものであることを明らかにする。

第2章では、フォーサイスが強調する意志的な祈り、祈りの格闘性の目的を考察する。確かに神が摂理をもって歴史を支配しておられるのであれば、何ゆえに人間が祈る必要があるのかという疑問に答えることができなければ、祈りが真に力強いものとはならない。フォーサイスはその疑問に対して、絶対的に自由な神は、またご自身の自由の一部を創造において人間に賦与されたのであり、それゆえに人間が神から与えられた自由を用いて神に祈り求めることこそ神の御心であると言う。彼は、われわれが祈ることは創造における神の意志と深くつながっていることを以下のように述べる。

「自由は神のかたちであり、ある意味ではその部分である。もし人間が自由を行使しないならば、神と神の自由を裏切ることになる」。

神の主権は人間の自由を無視するものではなく、人間の祈りを通して神は歴史を動かしていかれる。フォーサイスは、それを神の仲介的、超越的な関わりと述べている。

「人間が神の意志に反抗できるのは、神が仲介的、超越的であろうと欲し、神が一時的に反抗されることを欲しておられることに、反抗が許されているからである」。

(When we resist the will of God we may be resisting what God wills to be temporary and to be resisted, what He wills to be intermediary and transcended¹.)

神は人間をしてご自身に向かって願い求めさせ、その祈りを通してこの地上に御旨を成就していかれることは聖書の基本的な使信である。すなわち神は決して人間の自由意志を無視して人間をロボットのように動かされるのではなく、人間が意志的に神に祈り求めることを求めておられるのである。彼が祈りにおける人間の意志を強調したことは、彼がピューリタンの契約神学を自覚的に継承していたことと深い関係がある。すなわち神の恩寵は人間の自由意志を無視するものではなく、むしろ人間が自らの意志を用いて神に祈り求める積極的な姿勢を生み出すのであり、祈りにおいて義務と自由が両立することを意味する。

¹ フォーサイス『祈りの精神』 Forsyth, *Soul* 87.

またわれわれが何のために格闘的祈らなければならないのか、その目的の第二点目は、神の意志との格闘的祈りにおいて神の歴史が成就するのと同時にわれわれ自身の霊的人格が完成されていくという点にある。それはヤコブが神の使いと夜明けまで格闘した結果、彼の腰の関節が外れた、すなわち彼の自己中心の罪の性質が砕かれたという創世記の記述に典型的に表れている。フォーサイスは、神が何よりも養育しようとして心を砕かれるのは祈りの人格であると言う。われわれは神との人格的關係の行為としての祈りにおいて神の聖なる愛との關係に入れられることによって、神の栄光のために生きる意志を自らのものとするのできるのである。

第3章においては、われわれは祈りの格闘性をどこから汲み出すことができるのか、その神学的根拠について論じる。それは、フォーサイスが「祈りは十字架から汲み出さなければならない」(Prayer must draw from the Cross.)と述べたように、十字架において決定的に啓示された神の救済の意志である。まさに十字架において贖罪という歴史における神の最大の御心の成就のために御父と御子が格闘的に祈られ、その祈りを通して神と人間との間の人格的關係回復が成就したゆえに、われわれの祈りもまた格闘的たらざるをえないのである。

従来刑罰代償説においては、キリストはわれわれの罪の身代わりとして御父によって刑罰を受けられたと言われるが、その背後に御子を世に遣わした御父の祈り、また御父の意志に服従して人間の罪とその結果としての呪いを身に負われた御子の祈りがあったことを忘れてはいけない。御父は御子において苦しみつつ祈り、御子は御父の意志と格闘して祈られた。その祈りが聖霊を通してわれわれのところにもたらされるゆえに贖いがわれわれの内でも成就するのである。フォーサイスは「贖罪と贖罪におけるわれわれの解放の行為は祈りの性質の中にある」(The action of Atonement and of its release of us is in the nature of prayer.)と言う。それは祈りが神から出て神へと帰る運動の中に存在するように、贖罪もまた神の人類救済の意志から出て神へと帰る運動であり、そこにおける御父と御子との激しい意志的戦いを通して成就していく祈りの消息を的確に表している。

贖罪のための神の戦いは、十字架において御子を打たれ、捨てられ、死なせるほどの犠牲を伴うものであった。それは神ご自身における戦いであり、フォーサイスが言うように、それは神にとって御自分の右手を切り落とすような痛みを伴う愛であった。十字架における神の愛は単なる赦しの愛ではなく犠牲を伴う愛であり、その犠牲をご

自身において担われた愛である。フォーサイスはそれを神の「聖なる愛」(holy love) と言う。神の聖なる愛がわれわれの祈りの格闘性の原動力である。神の聖なる愛を満たすことができるのは、御父の意志に対する御子の従順の意志における聖性のみであり、そこにおける御父、御子、御霊における格闘的祈りを通して神ご自身がご自身の聖性を満たされたのであり、その祈りが聖霊によってわれわれに迫るとき、祈りは格闘的たらざるをえないのである。

第4章は、いかにしてわれわれが祈りの格闘性に到達することができるのか、その実践的な課題を論じる。そしてこの緊急の課題に対して二つの側面からの考察を試みる。一点目はフォーサイスが「不断の祈り」と呼んだ生活に密着した祈りによってこれを実現するという点である。彼が生活の只中で祈ることを強調した理由は、いかに美辞麗句を並べても自分の生活と関係のないことを祈っては祈りが真剣なものとならないからである。また彼が祈りの内容を精神生活のみに限定することなく自分の肉体の健康や経済的な問題も含めて祈ることを勧めた点は重要である。われわれは病の癒しのための祈りと言うとすぐにご利益的祈りとして敬遠する傾向があるが、そのようなギリシア的霊肉二元論を克服しなければ、祈りが真剣な祈りとはならないからである。

また祈りの格闘性の実現のために重要な第二点目は、聖霊の豊かな働きの中で祈るということである。祈りは神と人間との垂直運動であり、その原動力は十字架において決定的に啓示された神の救済の意志であり、人間の側から発したものではなくまさに神の側から起こったことであるゆえに、祈りの格闘性は単なる人間の熱狂を意味せず、父なる神が御子においてわれわれを救おうとされる熱い救霊の情熱がわれわれの上に注がれるとき、祈りの情熱となり格闘性となるのである。またペンテコステで初代教会に聖霊が降ったときに教会が誕生したように、聖霊、祈り、教会は切り離すことができない。祈りは本質的に神との一対一の対話であるが、そのような神との深い人格的關係は、教会における聖霊の豊かな注ぎによる熱い祈りによらなければ現実的には成立し得ないのである。

結びとして、われわれの教会が本来の目的である福音伝道の使命に力強く前進して行くために必要な信仰の確かさをもつためには、神の恩寵のリアリティーに触れる体験を必要としており、そのために祈りの格闘性を回復しなければならないことを述べる。

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 106DC004 名前 野口日宇満